

水木しげる氏

表紙絵

＝鬼太郎とゲゲゲの森の仲間達＝

表紙絵：水木しげる

・ 子どもの本に親しむ会	2～3
・ 利用者懇談会	4
・ 読み聞かせ交流会	4
・ 映画資料のご紹介	5
・ オリンピック・パラリンピックの展示	6
・ 図書館ボランティア紹介	6
・ 読書会という楽しみ	7
・ 郷土の歴史と伝承	8

平成29年度 子どもの本に親しむ会 「子どもの本を書き続けてきて」

講師 ^{たかどの} 高楼 ^{ほうこ} 方子氏

平成29年11月30日（木）に、『まあちゃんのながいかみ』や「つんつくせんせい」シリーズなどで人気の児童文学作家・絵本作家の高楼方子氏を講師にお迎えし、創作の源やご自身の作品についてお話いただきました。講演の内容を一部紹介いたします。

◆リンドグレーン、ケストナーとの出会い

私が最初に「おはなしを書くのは面白い」と思ったのは、小学2年生の国語の課題でおはなしを想像して書いたとき。場面を工夫してでたらめな事書いてもいいと思うと、急にうれしくなり一生懸命書いた。

小学校6年生の頃、リンドグレーンの『名探偵カッレくん』を読んで、田舎の夏休みの子どもたちのいきいきとした、不思議な空気に魅了された。言葉を連ねて文章にただけで、独特の世界ができる不思議さを初めて感じた。無から有を作ることができる人間の自由さに気がついて、非常に開放感を覚え、自分も書きたいと思った。

ケストナーという作家にも感銘を受けた。『飛ぶ教室』は非常に面白く、師弟愛や友情など美しいところがたくさんあるが、その他の、本の中にしかない香りや色が非常に魅力的だった。その香りや色は全て言葉から、文章からしか出てこない。なぜ行間から立ち上ってくることができるか、ということは謎だ。まるで魔法の粉がかかったような世界ができている。これらの本を読んで、ますます私もこういう本を書いてみたいと思うようになった。

◆おはなしを書くときに大切にしていること

ストーリーは絶対に大切だが、しかしそれよりも、言葉の連なりからあふれてくる、ある種の香りのようなものを閉じ込めたい。本を開けばその本だけの世界がそこにある、というのを目指している。

酒井抱一という日本画家の絵は、誰もが目にしている日常的なものを、非日常的なものにまで磨き上げていくことで、芸術にしている。私は絵を習っていたとき、先生に庭からピーマンを採っておいでと言われたことがある。少し葉っぱを付けて採ってきたところ、茎からごそっと採るように言われた。ピーマンの美しさを絵に描くために、必要な葉っぱと必要でない葉っぱを自分で考えながら取っていく。結局残ったのは、私が最初に採ろうとしていたくらいのものだが、最初から少しだけを採るのと、自分で考えてトリミングすることの違いがある。手を入れていくことは、真実を取り出し普遍化していく行為だと学んだ。突き詰めてあるものを磨いていくという作業が、創作していくときの面白さだ。頭を使ってより良い言葉を考えながら作っていくことは非常に面白い。これは絵本であろうと、長編であろうと、どんなに面白おかしいふざけた話だろうと、全て同じ気持ち・姿勢でやっている。



◆物語作品について

最初に書いたのは『ココの詩』。私は20代の終わり頃、フィレンツェに住んでいた。そこで、フィレンツェならではの香りが出せるといいと思いながら書き始めた。処女作には色々なものが詰まっているといわれる。若葉の木の良さというのは、怖いもの知らずだが熱意があるところ。原石のように荒削りで力がある。年を取ると、完成度を高めたいと思ってしまうため、自分でどんどん直してしまう。しかし『ココの詩』にはそういう良さがあつた。そのエネルギーというものは、面白いものだと思う。

長編2作目は『時計坂の家』。舞台の函館は生まれ育った街。母方の祖父母の家は山のかたわらにあり、2階に上がる階段の突き当りにドアが打ち付けられていた。ドアの向こうは何だろうという気持ちと、函館のひなびたような不思議な雰囲気の混ざった話を作りたいと考えた。私が書いた80冊の本の中でどれが一番好きかと聞かれると、この本かもしれない。しかし、実は私は、自分が作ってきた本は全部好き。子どもに悪い影響を与えたくないし、できるだけ楽しく読んでもらいたいから、自分で好きだと思うものを出している。

長編3作目は『十一月の扉』。この本は札幌が舞台。11月という冬が来る前の独特な季節の中で、女の子が孤独になることを書いている。孤独になる時間は本当に大事。その時間の中で、色々なものが醸成されていく。ものを書くことは、何とも言えず孤独との戦いだ。

長編4作目は『緑の模様画』。小学校卒業から中学校に入るまでの不安と、清らかなものに対する憧れを抱えたピュアな気持ちを書いた。この本がきっかけで、『小公女』を翻訳した。古典は読むたびに面白く感じる多面的なきらめきをもっている。所々に名場面があり、きれいな宝石の間をビーズで繋ぎ止めていったおはなしだと思う。1つの良い訳を思いつくまで、何度もやり直した。翻訳は初めてだったが、大変良い経験だった。

『ルウルウおはなしして』は、自分の子どもをモデルにした。いつもは私自身の中にある子どもを基準にして、子どもの時どう感じていたか、どういうことに腹が立ちどんな思いで生活していたか、わくわくしたかを拠り所にしている。この本の時は珍しく、自分の子どもの小さい時の様子を見て書いた。“子ども部屋”という単語が醸し出す、明るくて日が差しでぬくぬくとした幸福で満足している世界をあふれさせた。

◆エッセイ『老嬢物語』について

この本には、本の中や外国で出会ったおばあさんなど、色々なおばあさんが出てくるが、カットは全て私が書いた。私は『いじわるばあさん』（長谷川町子著）が大好きで長谷川氏のような調子で描いている。



最後に『老嬢物語』から、石井桃子氏（児童文学作家）の出てくる「忘れえぬお留守番」を朗読していただきました。高楼さんは作品のイメージそのままの雰囲気をまとった方で、豊かな言葉があふれ出た楽しいお話は尽きることなく、満員の聴衆を魅了した講演会となりました。

高楼 方子（たかどの ほうこ）氏



児童文学作家、絵本作家。路傍の石幼少年文学賞，児童福祉文化賞，赤い鳥文学賞，小学館児童出版文化賞，産経児童出版文化賞を受賞。絵本や童話や児童文学など，子どもの本の世界で活躍している。

平成29年度 利用者懇談会



平成29年11月16日（木）に文化会館たづくり10階学習室で、午後2時から2時間余にわたって実施しました。

今年度は、図書館をもっと身近なものとして使っていただくにはどうすればよいか、その一つのヒントになればということで、前半に「半径800メートルのしあわせー図書館を上手に使うための本の探し方」をテーマに講座を行いました。

本の並べ方のルールやレシートから本を探すちょっとしたコツ等を紹介し、実際に映画資料室に移動して資料を参加者に探していただきました。

意見交換の部では、調布市立図書館のボランティアを担っていただいている方々に、普段の活動から出た貴重なご意見をいただきました。また、汚損本に対する図書館の対応や、オリンピックやラグビーのワールドカップで調布にいらっしゃる方へのサービスについて等の話題があり、活発な意見交換の場となりました。いただいたご意見・ご要望を、今後の図書館サービスに活かして参ります。



平成29年度 読み聞かせ交流会



市内には、小学校・幼稚園・保育園・児童館・公民館・保健センターなどで、子どもたちへの絵本の読み聞かせを行っている方が大勢いらっしゃいます。日ごろどのような活動をしているのか、子どもたちの反応、疑問に思っていることなどを情報交換する場として、平成29年10月26日（木）に、文化会館たづくり6階会議室で「読み聞かせ交流会」を開催しました。

今回がはじめての開催でしたが、長年読み聞かせをしている方、小学校で読み聞かせを始めた方、これから読み聞かせを始めたいと思っている方など、10人の方の参加がありました。

交流会では、高学年に読み聞かせをする本選びに迷っているという声に、「こんなテーマの本はどうか？」、「関連してこんなシリーズも紹介しては？」と長年読み聞かせを続けている方からのアドバイスがありました。図書館に対しては、「年齢別や季節別に読み聞かせに向く本のコーナーを設置してほしい」、「各図書館でどのような展示をしているか知りたい」など、図書館サービスの参考になるご意見をいただきました。

市内のさまざまな場所で読み聞かせをしている方々は、子どもたちにおはなしの楽しさを伝え読書への興味を引き出すうえで欠かせない存在です。図書館は子どもの読書に関わる方々の支援をしています。今後も読み聞かせ交流会を継続していきますので、どうぞご参加ください。

映画資料のご紹介



映画資料室の様子

映画資料室で収集している資料をご紹介します。

調布市立図書館 5 階に映画資料室が誕生したのは平成 7 年 1 0 月です。現在の中央図書館が開設したのと同時に新設されました。開館準備からこれまで 2 0 年以上継続して収集してきた映画資料は、映画ファンから学生、映画関係の仕事をしている方々まで、幅広い層に利用されています。

書籍 約 30,000 冊（撮影台本 2,500 冊・映画パンフレット 2,200 冊 含む）

雑誌 約 1,200 冊（刊行中 20 タイトル）

『キネマ旬報』（1926 年～）『映画の友』（1931 ～1968 年）などの古い雑誌もあります。

以下は非公開資料です。

（映画資料室内などの展示で公開しています。）

映画チラシ 約 9,800 枚

映画ポスター 約 2,800 枚

スチール写真 約 5,500 枚

ロビーカード 約 1,200 枚

映画美術の図面

撮影所ニュース

映画新聞

脚本家直筆の撮影台本

この他にも様々な資料があります。



映画資料室内の展示の様子

※数字は 2017 年 3 月 31 日現在

じろの豆知識&お願い



①映画資料室にある本は、背表紙のラベルに、Movie の頭文字をとって M の表記があります。映画の原作となった小説や映画関係者のエッセイなどもあります。

②映画ポスターは、図書館全館のぴゅう太でご覧いただけます。利用方法はカウンターでおたずねください。

③映画資料寄贈のお願い。「映画のまち調布」の足跡をたどる日活・大映を中心とした日本映画の資料、さらに外国映画を含めた劇場公開映画のプログラム・ポスターなど幅広い資料を収集しています。「映画のまち調布」の資料充実のため、皆様のご協力をお願いします。

オリンピック・パラリンピックの展示

中央図書館5階で、オリンピック・パラリンピックに関する展示を行っています。

1964年東京オリンピックやオリンピックの歴史に関する図書をはじめ、近年の写真集や、競技のルールブックなどを展示しています。

また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が予定されている競技会場の地図も掲示しています。

このコーナーは、2020年まで、本や情報を随時更新しながら継続していく予定です。どうぞご利用ください。



図書館ボランティア紹介

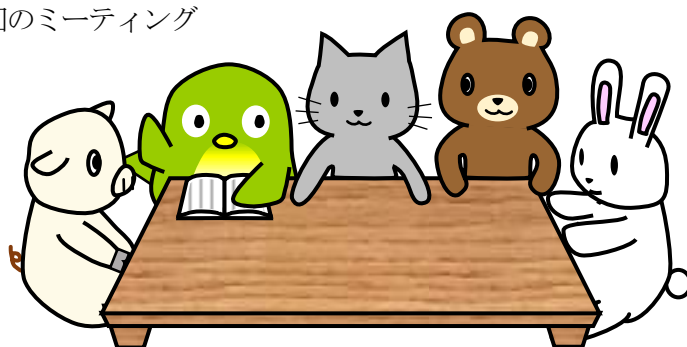
調布市立図書館では、多くのボランティアの皆さんと共に、市民に身近で親しまれる図書館づくりを目指して活動しています。ボランティア活動には、館内ボランティアと宅配協力員があります。

館内ボランティアは、書架整理が主な活動内容ですが、館内の緑化活動にもご協力していただいています。

宅配協力員は、ハンディキャップサービスの1つとして、障害や高齢、病気などの理由で来館が困難な方へ、本や雑誌の宅配サービスを行っています。

また、年に数回のボランティアミーティングを開催し、ボランティア同士や図書館職員とのコミュニケーションの場も設けています。平成29年度第2回のミーティングでは「ビブリオバトル」を行いました。

ボランティア説明会は、毎年5月頃に開催し、新規活動者を募集します。平成30年度のボランティア説明会は、5月17日（木）に開催予定です。詳細は、ポスター・チラシ・図書館ホームページでご案内いたします。



読書会という楽しみ

Sさんとお会いしたのは、図書館ハンディキャップサービスの利用者懇談会でした。お一人で席に着かれたので協力者の方かと思ったら、視覚障害の当事者ということに驚きました。15、6年前に多発性脳梗塞で目が見えにくくなって自身の本は全て処分。しかし、もう一度脳梗塞が起きたら光を失うと言われ、このままではまずい、大きな活字の本なら何とか読めると読書会に参加するようになり、苦勞して読んでいるとき、ハンディキャップサービスを知り、DAISY図書*を利用するようになりました。

そんなSさんの人生には子ども時代から本がありました。家族を看病しているとき、亡くされたとき、また、ご自身の闘病を支えたのも本だったと、有吉佐和子の『花岡青洲の妻』、高見順の『闘病日記』など、その時々を読まれた本を挙げお話しくださいました。Sさんは、本は一人で読むだけでなく、人と話したり書くことによって深まり、残っていくといいます。読書会は一冊の本を読み、参加者がそれぞれの考えを話す中で、いろいろな考え方があることを知る。受け入れられない見方があっても遠慮なく言い合える、違っていいというのが楽しいとおっしゃいます。そして入っている会が性に合ったのでしょね、だから10年以上も続けているとも。

みなさんもお自分に合う読書会を探してみませんか。また、新たに読書会を始めたいという方は図書館にご相談ください。図書館分館の集会室(無料)もありますし、団体で本を1か月借りられます。5月から初めての方のための読書会が始まります。平成30年度のテーマは「映画と文学」で、映画化された作品を取り上げます。各回ごとの参加もできますので、ぜひ一度いらしてください。

※DAISY図書：活字の読みが困難な人のために作成されたデジタル録音図書。ほとんどの作品は1枚のCDに収録され、専用の機械を使用することで、章や見出し、読みたいページに移動することができます。

平成30年度 初めての方のための読書会 日程表

	日 時	テキスト	著 者
第1回	5月12日(土)	舟を編む	三浦 しをん
第2回	6月9日(土)	図書館戦争	有川 浩
第3回	7月14日(土)	父と暮せば	井上 ひさし
第4回	9月8日(土)	夏の庭—The friends—	湯本 香樹実
第5回	10月13日(土)	夜のピクニック	恩田 陸
第6回	11月10日(土)	小さいうち	中島 京子
第7回	12月8日(土)	飛ぶ教室	エーリヒ・ケストナー
第8回	1月12日(土)	鉄道員(ぽっぽや)	浅田 次郎

※時間は13:30～15:30、会場は文化会館たづくり内会議室で行います。

1. 農家の春

大正初期（100 年ほど前）までの調布では、稲、麦、粟^{あわ}など五穀^{ごこく}の栽培がさかんでした。農作業のスタートを控えた春になると、村々では、その年の豊作を祈願して、お稲荷^{いなり}さまを祀^{まつ}（まつ）る「初午^{はつうま}」と呼ばれるお祭りが行われました。この頃、田んぼの神様が、馬に乗ってくるという言い伝えがあり、旧暦^{うま}の午^{えと}（干支）の日の行事として行われたともいわれています。

いりまちょうの農家では、この日、近所親戚が集まって、田に水を引くための川掃除の相談も行なったそうです。

また、野川には、桜の花の咲く頃になると、食用の川魚であるハヤ（ウグイ）が上流からたくさん下ってくるので、農家の人々は竹籠^{たけかご}状の漁具で獲りました。そして、苗床^{なえどこ}作りなどの農作業が本格的になる前に、自然の恵みであるこの魚を食べて栄養を補給しました。

2. 自然の暦

自然の影響を強く受ける農業では、作物の出来、不出来は、農家の年間の暮らしを左右したので、種まきに適した時期をみきわめることが、とても重要でした。そこで、長い間の経験の積み重ねが代々伝えられてきた、自然を利用した暦（伝承の暦）が利用されました。これは、周囲の植物や景色などの移り変わりを見て、その年に合った種まきの時期を決めたりするものでした。

小島町や柴崎では、粟^{あわ}や黍^{きび}の種まき時期は、エゴノキの花の咲き方で知ったといいます。古老の話によれば、5月から6月にかけて、白い小さな花を咲かせるエゴノキは、木の下から上へ順番に開花するので、この花を目じるしにして、木の中段の花が咲く頃に、粟や黍の種まきをしたそうです。



たかもりめし
高盛飯を食べる柴崎稲荷の初午祭

粟などの雑穀は何年も貯えがきくので、飢饉^{ききん}に備えたり、米の不足を補ったりするための大切な食べ物でした。

麦の種まきは、小島町では、「お日様が富士山のとてっぺんに入る時分が、麦のまき旬^{しゅん}」といって、10 月半ばから 11 月前半にかけて行ないました。また近隣地域では、富士山が笠のような雲をかぶると雨が降ると言われていました。そこで、濡れると傷みやすい小麦の取り入れや脱穀を早めるなど、富士山の方角を見て天気を予測し、仕事の段取りをしていました。

このようにして、農家の一年は、自然のサイクルを活かして計画的に進められました。調布でも、かつて身近で豊富にあった美しい自然を観察し、その恵みを活かしながら、暮らしが営まれてきたのです。

参考文献:『調布市報』（昭和 60 年 6 月 5 日号「まちの話題」）

刊 行 物 番 号

2017-197

図書館だより 第 247 号

平成 30 年 3 月 25 日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>